



エコなお題目とビジネスとは、通常は相反するものと思われる。これはエコロ側のプロバガンダによるもの大きい。既存の企業は、自分の金儲けのためひたすら環境を破壊し、無駄と大量消費を煽り、人々を苦しめている。

そして既存の銀行や金融システムも、通常はエコロ連中に敵視されることが多い。いや、そもそも銀行システム自体、エコロな人や左翼くすれには人気がない。昔ながらの、金貸しは汚い、利息はずるい、といったまちがった思いこみが往々にしてかれらを支配している。そしてそれに加え、いまの銀行や金融システムは既存のビジネスにばかり金を貸すことで、環境破壊を推進し、阿漕な金貸しとしていたいけな庶民をいじめ、あやしげなバブルをつくりだしては庶民の生活を破壊する、けしからん連中である。というわ



apバンクは、このミュージシャン連中がお金を出して作った銀行、というよりNPO法人だ。バンクとはいえ、本物の銀行じゃないので預金を集めることはできない。貸す原資はミュージシャンたちの持ち出し、さらにコンサートを開いたり、CDを売ったりしてお金を儲けている。設立は2003年で、融資条件としてはものすごくいい。最長10年上限500万円、金利は一律1%だそう。エコロとか、新しい社会のあり方とかいったお題目のついたプロジェクトや企業に、お金をを出してくれることになっている。

さて、これに対して融資実績は59件で2億8千万円ちょい。どう思う？ 多いだろうか、少ないだろうか？

無垢なチルドレンの脳天気なエコロ・ワールド

ミスチル桜井や坂本龍一もハマった

「apバンク」って いったい何なの!?

評論家・翻訳家
山形浩生

け。本当ならすばらしく華開くはずの、環境に優しいエコロなビジネスが山ほどあるのに、銀行がそういうところにきちんとお金を貸さないから、そうしたビジネスは芽が出ず、既存の環境破壊ビジネスばかりが栄えます、許せん、というのが理屈となる。

そう考えていた時代がわたしにもありました。高校生くらいときね。



が、それは本当だろうか。そしてそうしたビジネスへの融資やその他資本提供システムがあったら、エコロなビジネスは栄え、既存の汚い産業は打倒されるのだろうか。

それを確認できるおもしろい試みがある。ミスターチルドレンの連中や坂本龍一がはじめた、「apバンク」なる代物だ。

答えを先に言うと、少ない。むちゃくちゃ少ない。件数的にも、5年でたった60件ほどって何よ、それ？ さらに融資実績が3億円にすら達してないってどういうこと？

ちなみにこの手の金融とか銀行の話をして困るのは、みんなが何やら自分の給料やご家庭の感覚を持ち込んでしまつことだ。3億円「も」融資した、とかいう人が平気でいるんだ。でも実際には、3億円くらい事業レベルで考えればはした金だ。どっかに小さな橋を一つ造るくらいでも、このくらいのお金はすぐにかかる。だれかが家を一軒建てるのも数千円はかかるでしょ。もちろんその家の家主さんにしてみれば、かなりの大金ではある。でも家一軒できることが社会（少なくとも

いまの日本社会）にとつて、大した意義のあることではないというのは見当がつくでしょう。5年で大騒ぎして、家が十軒建つか建たないかくらいの融資しかできていない？ 鼻くそみたいなものだ。



金額じゃないんだ、という説もあるだろう。問題は中身だ！ 本当に社会をエコロに変える、重要な起爆剤となるようなプロジェクトに融資しておるのだ！ セコい建て売り住宅なんかといっしょにするな！と。

はいはい、そういうこともあるかもしれない。ではその実際の融資の中身を観てみよう。apバンクは、お題目はいろいろおきれいではあるけれど、自分のところの財務状況についてはぜ

apバンクの融資実績3億円弱は、少なすぎて鼻くそみたいなもの。

んぜん公開していない、非常にディスプレイクロージャアの悪いところだ。大したことをしているわけでもないし、そんなに後ろ暗いところがあるわけでもないはずなんだが、なぜだろうね。でも、融資先に関しては、一応apバンクのウェブページ (<http://www.apbank.jp/>) で一通り紹介している。

これについての細かい分析は、ぼく



apバンクの公式ページにある「融資について」を開くと、融資先の事業内容や返済計画などの各種データを見ることができる。

のウェブページ (<http://cruellog/other/apbank.html>) があるのでここでは割愛。ただし大まかな傾向を述べておくと、全体にしょぼい。目新しい試みはあんまりなく、いろんな団体の補助金出るまでのつなぎ資金とか、オーガニック商品の仕入れ資金とか、そんなのがたくさん。自然食レストランや店舗の建設資金、モデルハウス建設資金、ソーラーパネルや風車の建設資金の一部なんてのもある。けどどれを見ても、別にapバンクに金借りなくてもすんだようなものばかり。

さらに一部は、個人が自分の家にソーラーパネルを入れたりするのに融資。うーん。もちろん何に融資するかはapバンクの勝手ではあるんだけど、それが本場にapバンクの建前上目指している目的に合致しているかどうか。通常、この手のお金は事業用の融資と消費用の融資とはきっちり分

けるものだと思うんだが、明らかに個人の消費のお金を出すというのは、設立主旨からすると変じゃないの？ 自宅を持つているような人は比較的金持ちなんだし、そつした人はapバンクに頼らなきゃいけなかったはずはなんだけどね。

それ以外には、一部の団体が明らかに「apバンクに金を借りた」という話題性のために借りている。自転車リサイクル組織が10万円借りました、とか。本場にそれって、apバンクに借りる必要があったんですか？ 別に借りてもいいではないか、という意見もあるだろう。だが、apバンクの資金だって限りがある。そこに融資がいったということは、他にどこか融資がまわらなかつたところがあるということでもある。

ごく少数、本当におもしろいものもある。紙おむつのRDF（ごみ固形）

燃料化など。また都内駐車場に仮設建築を作って店舗やオフィスとして貸し出すおもしろいプロジェクトにも融資がいつている。

さて、これをどう考えるべきだろうか。なぜもっと世界を震撼させるようなエコロ事業がたくさん出てこないんだらうか。世の中にあるはずのエコロな取り組み、お金がないばかりに目のを見ないはずの各種プロジェクトはどこへいったんだらうか。

可能性として、まずapバンクの取り組みが知られていないのかもしれない。すごいエコロ事業はたくさんあるんだけど、かれらはこんな有利な貸し手のことをまだ、知らないのかもしれない。

だが……一応は、天下のミスターチルドレンと坂本龍一が鳴り物入りで設立した代物だ。apバンクが主催したコンサートには、去年は一日で2万7千人きている。CDも30万枚が完売だとか。これが知られていないなら、何が知られているんだらう。だからたぶん、この可能性は非常に大きい。

金の特性が効いているのかもしれない。上限500万円なんてはした金では、まともな事業は寄ってこないのかもしれない。資金がチマチマしているから、集まってくる事業もチマチマしているのかもしれない。あるいはapバンクの融資手続きがあまりに煩雑、そして／あるいは時間がかかるのかもしれない。

この可能性もないわけじゃない。途上国にいくと、世界銀行から支援を受けるべきかどうか悩んでいる団体と、きどき出会う。融資はほしいけれど、世界銀行は変な会計規則や報告義務をあれこれうるさく言ってくる。それを満たそうとすると、事業全体がコスト高になって、世銀からの低利融資のメリットがほとんどなくなるか、かえって割高になってしまふ、というケースがたまあるのだ。あるいは、日本のODAは審査にやたらに時間がかかって使いものにならない、という文句もよくきく。

ちなみに、『金融財政事情』2008年3月10日号に、apバンク理事の見山謙一郎が寄稿している。あまり中身の文章のだけれど、そこには

団体のつなぎ資金や自宅改装費……apバンクの融資が本当に必要？

こうある：

「一般の金融機関でもコンプライアンス上、環境破壊や反社会的な事業に対して直接的に融資することはないだろう。しかし企業全体に資金繰りにまぎれば、最終的な使途までは完全に把握しきれない部分がある」

文の主旨としては、それに対してapバンクのようなNPOバンクならその用途を把握しきれるので、社会的に責任ある融資ができる、ということらしい(明確にそう書かないのが文章として非常にすごいところではあるが)。ぼくは、そんなことはあり得ないと思う。apバンクは本当に自分の融資先のあらゆる資金の流れを把握しきってるの？ 大して人もいないくせに、そんなことができるわけないだろうに。既存の金融機関ですらできない

を使わずに、自然の恵みだけで育ったナントラかたら、というお題目はいくらも聞かされる。でも……有機農法は収量が低い。こう書く、いやそんなことはない、すばらしい高い収量が得られるんだ、肥料会社のネガティブキャンペーンにみんなだまされてるんだ、なんてことを言い出すキ××イが必ず出てくるんだけど、そんなことあるわけないでしょ。肥料使わずにもすごい収穫の上がる方法があるなら、みんなとつっくにやっていますって。有機農法は、同じだけの量を得るのに集約農法より広い面積がいる。そのために、みんなのお好きな森を切り倒したり原野を開墾したり、自然破壊が必要だ。

あるいは、その有機農法万歳と同じ

ことを、なぜNPOバンクができる？ 万が一それができるとしたら、apバンクは借り手にもすごい情報ディスクロージャーを要求することになる。それが煩雑すぎてだれも借りない、という可能性はなきにしもあらず。



して最後の可能性。実際には、まともなエコロ事業がそんなにない、という可能性だ。融資や各種の資金提供さえうまくいけば稼働するようなすばらしいエコロプロジェクトなんて、実在しないんじゃないの？ 最終的には融資なら、お金が戻って来なきゃいけない。その見通しがきちんと立つようなエコロなプロジェクトは、実際にはそんなにはないのではないか？ あるいはあつても、そんなところにはapバンクなんかじゃしゃり出るまでもなく、すでに既存の仕組みでお金が十分にまわっているのではないか？

理屈で合成保存料や農薬は反エコロだということになっている。でも農薬や合成保存料なしには、育てた食物の2割や3割といった相当部分はムシに喰われたり雑草にやられたり腐ったりしてしまふ。ばかな2ちゃんねらーには、「食べ物と粗末にするな」なんていうお題目を嬉しそうに掲げる連中が多い。まあこれ自体は、あれこれ留保がつくけれど、それなりに分のある意見ではある。でも粗末にしないためには……保存料で腐らないようにしたほうがいいよ。腐ると捨てるしかなくて、粗末にせざるを得ないものね。人様の食い物をムシやネズミに喰わせるのは、かなり粗末だ。そして、それはエコロな恫喝屋たちに言われるまでもなく、収益原理のためにみんな何も

ぼくはたぶん、これが理由だと思っている。そしてそれには根拠がある。既存ビジネスが反エコロでひたすら環境破壊を目指しているなんてのは、明らかなのだからだ。



いうのもだね、どんな事業だったを削減する必要がある、というのはまぎれもない事実だからだ。したがって、ちゃんと事業としてなりたつエコロなお話は、たいがいすでに既存事業に無理なく取り込まれる。エコロな話の大半は、無駄な消費を押しさえよという話でしかないからだ。

そして、多くの人がエコロだと思っていることが実はそうではなく、反エコロだと思っていることが実は環境によいことも多い。たとえば、有機野菜は本当にエコロなのか？ 関係者はたいがいそう思っている。殺虫剤や肥料

言わなくても採用する。



れを考えると、既存ビジネスは無駄をなくし、コストを削減するというインセンティブがある以上、すでにかんりの部分、エコロな方向性に沿った試みになっている可能性が高い。一見反エコロに見えるような活動ですら、本当にそうかよく考える必要がある。だからといって、既存ビジネスがすべてすばらしいとか、新しい可能性がまったくないということじゃない。まだまだできることはあるだろう。ただそれは、エコロな人たちの安易な思いつきレベルではすまない。apバンクの状況は、たぶんそうした事情を雄弁に物語っているんだと思うよ。

エコロ事業II地球に優しい、既存ビジネスII反エコロ、は大きなウソ。

山形啓生(やまがた・ひろお) 1964年生まれの評論家・翻訳家。大手シンクタンクで地域開発やODA関連調査を行うほか、SFやコンピュータから環境問題に至るまでさまざまな分野で、過激かつ平易な言葉により、読者を刺激する論考を発表し続けている。